

5 微小環境から考えるアトピーと皮膚T細胞リンパ腫の共通点

Comparison of immune microenvironment of atopic dermatitis and cutaneous T cell lymphomas

藤村 卓

FUJIMURA Taku

東北大学病院皮膚科講師

Summary

皮膚T細胞リンパ腫(cutaneous T cell lymphoma ; CTCL)の治療は、早期病変においては、ステロイド外用、紫外線療法など炎症性皮膚疾患の治療に類似することが知られている。一方、進行期においては、現在のところ、国際的にも first line の治療をはじめ定型治療は存在しないが、これは進行期の CTCL における腫瘍内ケモカインなどのさまざまな免疫環境が早期病変と異なることが一因と考えられる。本総説では CTCL の代表として菌状息肉症(mycosis fungoides ; MF)の腫瘍微小環境を免疫学的観点から解析し、早期から進行期にかけた MF の治療を炎症という観点から論じる。

腫瘍随伴性マクロファージ(TAMs)

多くの癌腫の間質に存在し、多彩なケモカインやMMPを産生することにより、腫瘍内浸潤T細胞のサブポピュレーションなど、それぞれの癌腫に特徴的な免疫環境を形成する役割を果たす。

ペリオスチン

細胞外マトリックス蛋白であり、線維芽細胞がTh2サイトカインで刺激されることにより産生亢進する。近年、腫瘍随伴性マクロファージの刺激因子のひとつであることが明らかとなった。

KEY WORDS

腫瘍随伴性マクロファージ(TAMs) / 菌状息肉症 / ペリオスチン / IL-4 / CCR4 陽性T細胞